九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

境界例心性からみた大学生の臨床的理解と支援

江上，奈美子

https://hdl.handle.net/2324/2236330

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式８）

氏　　名　：江上　奈美子

論文題名　：境界例心性からみた大学生の臨床的理解と支援

区　　分　：乙

博　士　論　文　の　要　約

境界例心性とは、境界例（境界性パーソナリティ障害）と類似・共通する心性であり、対人関係の困難、自己像や感情の不安定性、著しい衝動性、見捨てられ不安などを特徴とする。この境界例心性を強くもつ人々は、その特性がゆえに不適応を起こしやすいと言える。見捨てられ不安からのしがみつき、易怒性、自殺企図などの特性から、周囲も対応に悩むことが少なくない。境界例心性は、特に青年期に高まりやすいとされているが、その中でも比較的自由度の高い大学では不適応を見過ごされてしまい、適切な支援を適切な時期に受けられない場合がある。そのため彼らの困り事に早期に気付き、悩みが大きくなる前に支援を届けることが求められている。そこで、本研究では一般大学生を対象とし、境界例心性が強い大学生の特徴を自我機能や家族関係から理解を深めていくことを第一の目的とする。次に第二の目的として、境界例心性が強い大学生に対しどのような心理的援助が有用かについて、学生相談の特徴をふまえた視点から考察していくこととする。

第１章では先行研究を概観し、境界例心性の定義を「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」とし、境界例心性と境界性パーソナリティ障害は連続線上にあるものとして位置づけた。

第２章では、DSM－Ⅳ―TR における境界性パーソナリティ障害の診断基準を参考にしながら、既存の境界例心性尺度を改定した。その結果、「空虚感」「感情の不安定性」「衝動性」「自己像の不安定さ」「対人関係の不全」「見捨てられ抑うつ感」の６つの下位尺度が得られた。信頼性および妥当性についても検討がなされた。さらに、大学生の境界例心性の強さと変動する状況にどのくらい柔軟に対応できるかという自我の柔軟性、防衛機制の関連について検討を行った。その結果、自我の柔軟性の指標とした Ego-Resiliency においては、境界例心性が強い群がもっとも低いことが示された。また、境界例心性が強いほど、投影や価値下げなどの不適応的な防衛機制をとりやすいことが示された。

さらに、境界例心性が強い大学生がどのような日常生活を送っているかについて検討した結果、境界例心性が強い大学生は、学業をはじめとした達成領域でも対人関係でもネガティブな体験が多く、対人関係ではポジティブな体験も少なかった。一方、達成領域でのポジティブなイベントの体験頻度は境界例心性が強い大学生と弱い大学生の間に差異がなかったものの、快感情の抱き方には差が見られた。この結果から、境界例心性の強い大学生の方が快感情というポジティブな感情を抱きにくいことが示された。

第３章では、境界例心性と家族について検討を行った。まず、母親および父親の養育態度と境界例心性との関連性について検討した。その結果、特に女子学生において母親・父親の「情緒的・受容的な養育態度」と境界例心性に負の関連性が見出された。さらに、親子関係でなく家族全体を包括的に見る視点として家族の雰囲気との関連を検討した結果、家族の「冷淡・厳格な雰囲気」と境

界例心性との間には正の関連性が見出された。家族全体を見る視点をさらに深める目的で、家族機能に着目し、さらに大学生とその母親と父親の家族機能の評価が境界例心性とどのように関わるかについても検討した。その結果、家族機能の評価については、母親および父親の評価と境界例心性には関連が見出されず、大学生本人がもつ自分の家族の評価が境界例心性と関連を持つことが見出された。また、大学生と母親の「秩序とルールについて」の評価のズレの大きさと境界例心性には関連が見出された。

第４章では、大学の相談施設において、境界例心性が強いと思われた学生の事例を報告した。この事例においては、これまでの家族関係、対人関係、そして自分自身について振り返り、捉え直し、再び受け入れていくプロセスを共に辿った。境界例心性が強い学生に対して、安心して語ることのできる関係を形成する中で、カウンセラーとの関係を見つめながら、家族を始めとした対人関係や自己について捉え直すことの意義や、また身体化や行動化が激しい場合には学内外の医療・相談機関と連携しながら、ともに学生を支える環境を形成していくことの重要性が述べられた。

第５章では、総合考察としてまず、本研究のまとめと意義を述べた。また、本研究の限界として、今回行われた一連の質問紙調査には調査の対象、手続き、分析方法などに限界があるため、さらに検討していく余地があることなどが挙げられた。また、相談施設に来談しない学生への支援、早期発見や予防の視点からの支援、卒業後の追跡調査、境界例心性が強い大学生の周辺の人々に対する支援などの視点が提示された。